『文学界』（聚芳閣）新出資料と井伏鱒二聚芳閣勤務時代

前田貞昭

はじめに

井伏鱒二が勤務していた聚芳閣の主力雑誌『文学界』は、国立国会図書館・日本近代文学館に架蔵の計十号分が知られるだけであった。これによって、先に「『文学界』（聚芳閣）細目稿」を発表したのだが、阪本幸男氏から、両館で欠号となっている『文学界』が三重県立図書館に保存されている旨のお知らせを頂戴した。三重県の歌人・印田巨鳥の旧蔵書が三重県立図書館に寄贈され、その中に、先に現物が見られなかった『文学界』三冊が含まれていたのである。

甘利多子「印田巨鳥――親愛なる尊父で慈父」（『芸術三重』第三十八号、一九八八年九月二十五日）の紹介を借りれば、印田巨鳥（本名・恵助、一八九四年十二月十四日～一九七九年三月四日）は、「橋田東声系の歌人。記紀、万葉、その他多くの古代文学を究む。考古学者。」で、地元の歌誌『志支浪』、『覇王樹』〈三重支社〉などに関わりが深かったという。橋田東声は十回近く『文学界』に寄稿し、著書『評釈万葉集傑作選』（大正十四年六月）も聚芳閣から出している。その縁で巨鳥も『文学界』へ寄稿したものと思われる。

さて、その三冊とは、大正十三年十月創刊号、大正十四年八月第二巻第八号、大正十四年十月第二巻第十号である。それらの詳細については別の機会に発表したいが、ここでは、その三冊から得られた情報をもとに、前稿を補訂して井伏の最初の聚芳閣退社時期の仮説を提示するとともに、〈自伝〉的作品の資料的問題にも触れたい。

一、創刊号を資料として

『ＤＡＭＤＡＭ』〈ダムダム〉創刊号（大正十三年十月十日）に掲載された広告、『読売新聞』大正十三年九月二十一日発行第一七〇六七号掲載「よみうり抄」に拠って、『文学界』創刊号の実際の発売日を九月二十日とし、この実売日から逆算して印刷納本日を「九月十五日」と推測していたのだが、この印刷納本日付を現物に即して改めておきたい。

創刊号奥付には、「大正十三年九月廿八日印刷」「大正十三年十月一日発行」とある。三重県立図書館架蔵本は表紙（表紙の一）・裏表紙（表紙の四）を欠き、そこに印刷されているはずの印刷納本日・発行日に関わる法定文字が見られないが、発行日の三日前の納本という出版法の規定に沿うように「十月一日」から遡って「九月廿八日」を形式的に印刷日としたと推測するのが妥当であるようだ。

奥付等に印刷された発行日付・印刷納本日付は形式的なものに過ぎず、内務省への納本と取次店へ搬入するまでの間に規定の期間を

置けばよいというのが、当時の出版法の運用実態であったらしい。[4]このような運用実態であってみれば、実際の発売日に関しては、広告や新聞記事の方が実質的な意味を持つと思われる。

井伏が創刊に関わった聚芳閣発行『趣味と科学』の創刊が予定よりも大幅に遅れていたことは前稿でも触れたが、『文学界』も同様であったようだ。『文学界』創刊号編輯後記に相当する「編輯余録」冒頭に次のようにある。

□初号を九月一日に創刊する予定であつたが投書作品をなるべく多く載せたかつたのでその選のために約半月遅れた。寄稿をして下すつた諸氏及び多くの愛読者諸子へ深くお詫びを申上げる。

この「九月一日」が実売日を指すのか、表示発行日付を指すのか不明であるが、創刊号が九月二十日に売り出されたとすれば、最初の予定では発行日が「大正十三年九月一日」と表示され、実売もその表示発行日に近いところを企図していたということだろうか。

井伏聚芳閣入社に関わることで、この創刊号に拠って指摘しておくべきは、六十三頁掲載「毎号／懸賞募集規定」欄末尾に「編輯局厳選／責任者」として高梨直郎、松本清太郎、足立欽一の順で選者の三人の名前が掲げられているだけであり、宵島俊吉の名前が欠けていることである。勝承夫が宵島俊吉の筆名で加えられるのは、次の大正十三年十一月第一巻第二号である。

この事実は、創刊号の懸賞募集規定原稿の印刷所入稿あるいは校正の時点では、宵島を「文学界編輯局」には迎え入れていなかったことを意味する。おそらく、宵島が『文学界』編輯に携わっていなかったのみならず、聚芳閣にも入社していなかったということだろう。宵島と井伏は同時に聚芳閣に入社していると考えてよいので、井伏も、この時点では、聚芳閣に入社していなかったことになる。

ところで、もう一つの井伏（あるいは宵島）聚芳閣入社に関する情報が、創刊号口絵写真にあるはずだった。目次に「新進作家の俤／文学界編輯部員／（口絵二頁）」とあるのが、それだ。しかし、該当頁には口絵の一頁目（新進作家の俤）と同じものが上下逆転して印刷されていて、この文学界編輯部員の写真を確認できなかった。

口絵写真は措いても、早くて懸賞募集規定原稿印刷所入稿時点、遅くてもその校了時点（校了日は最大限遅く見つもっても、九月十五日前後だろう）、そのいずれかを過ぎてから、宵島・井伏が聚芳閣に入社したことが、『文学界』創刊号によって確認することができた。前稿で引いた、

▲宵島俊吉氏　井伏鱒二氏と共に聚芳閣に入り十一月創刊の「趣味と科学」の編輯に従事する

という『読売新聞』大正十三年九月二十日発行第一七〇六六号第四面掲載「よみうり抄」記事があるので、この記事掲載の九月二十日前後に井伏が、宵島と共に聚芳閣に入社したと見た前稿における推測は動かさなくてもよいと思われる。

これを聚芳閣側に立ってみれば、予定より遅れた『文学界』をようやく発刊し、次いで、もう一つの新しい雑誌『趣味と科学』創刊準備のために、新進詩人で数え年二十三歳の宵島、『父の罪』の翻訳一冊を出したばかりの二十七歳の井伏を雇い入れたという事情であったように推測される。

二、「乳母車」の掲載

新たに披見できた『文学界』三号分の内、井伏書誌研究で注目するべきは大正十四年八月第二巻第八号に井伏鱒二「乳母車」が掲載されていたことである。「乳母車」という標題を持つ井伏作品が実際に確認されたのは、これが初めてである。もっとも、新発見の作品ということではない。

井伏の幼い頃の記憶に題材を得たらしいこの作品は、従来、『不同調』昭和二年二月新人号第四巻第二号に発表された「歪なる図案」として知られてきたものである。

井伏は「完結しない月なみな生活」（『文芸通信』昭和九年一月）では、『不同調』に「乳母車」の標題で小品を書いたと記していたのだが（新全集第四巻三二六頁。以下、井伏文の引用は新全集に拠り、掲載巻と頁を附す）、その後、「雞肋集」（『早稲田文学』昭和十一年五月～十二月）連載途中に、標題は「乳母車」ではなく「歪なる図案」だったと訂正した。「雞肋集」では、次のようにある。

> 不同調の新人号に私が「乳母車」といふ短篇を発表したと書いたのは、「歪な図案」のまちがひであつた。子供のときの私と伊十とのことをモデルにして、幸福の定量と不幸の定量を代数の方程式で計算した短篇である。〔中略〕はじめ「乳母車」といふ題をつけ谷崎さんにも見てもらつたと記憶するが、不同調社へ送る際に「歪な図案」と改題した。（第六巻五十三頁）

「歪なる図案」中では〈乳母車〉を飾る刺繍が作中のモチーフに用いられ、また、「雞肋集」第一章「幼いとき」冒頭でも「子供のときの私と伊十とのこと」が乳母車の記憶と結びつけて回想されているので（第六巻六頁）、井伏が標題を「乳母車」と誤るのも理由のないことではないように思われるし、著者の訂正の言葉は強い。

だが、「乳母車」という標題の井伏作品について第三者の証言がないわけではなかった。井伏の友人・富沢有為男が「乳母車」なる作品を実際に読んでいたというのである。紅野敏郎は、『鷲の巣』大正十五年六月号に発表されたという富沢有為男「二人の新人に就いて――坪田譲治・井伏鱒二」に触れ、その内容を次のように紹介している。[5]

> すでにこの時点で、〔富沢は……前田注〕井伏の「岬の風景」を同人内山惇一にすすめられて読んでもいる。〔中略〕読んだのは「今春」と書いてあるから、大正十五年八月に掲載の「岬の風景」執筆時点は、かなりに早くなる。さらに富沢は、それにつづいて「山椒魚」原型の「幽閉」も「寒山拾得」も「夜更と梅の花」も「乳母車」も読んだという。

いや、そればかりではない。井伏「歪なる図案」掲載の『不同調』昭和二年二月号に、富沢は「再び井伏鱒二に就いて（附、秋山六郎兵衛に与ふ）」を寄せ、「井伏はよく過去十二年間の不遇に湛へしかも物する所のもの大小三十篇に近い製作があるうち『乳母車』は二三年前の作であつて我等はここから『人生の相似形』に就いて例へば霊妙なる因縁の如きものを可也的確にしかも深く覗き見る事をゆるされる様にし向けられてゐる。」〔傍点、ママ。傍線は前田。以下同様〕とも書いていたのだった。「『人生の相似形』に就いて例へば霊妙なる因縁の如きもの」なる表現は、『不同調』掲載の「歪な

る図案」ではなく、改題・改稿以前の『文学界』発表「乳母車」にもあった末尾部分を捉えたものだろう。

先に引いた「雞肋集」に井伏が書いているように谷崎精二に見てもらった作品の一つだとすれば、書かれた時期は、この『文学界』発表よりも、ずいぶんと早い時期になるし、ここに描かれた〈乳母車〉をめぐる挿話は、「不機嫌な夕方（一幕）」（『雄邦日本』第二巻第五号、昭和三年五月）や「不機嫌な夕方――芝居みたいな童話」（『蠟人形』第二巻第六号、昭和六年六月）で戯曲仕立てに改稿され、また、「朽助のゐる谷間」（『創作月刊』第二巻第三号、昭和四年三月）の一場面としても描き込まれたほどに、井伏の愛着濃い題材であった。そうであれば、この『文学界』以前に何らかの形で発表された可能性も否定しきれない。が、富沢が二つの文章で言及する「乳母車」も、「再び井伏鱒二に就いて（附、秋山六郎兵衛に与ふ）」で「二三年前の作」と言っているところから、『文学界』大正十四年八月号に発表されたものを指しているとしてよいだろうし、とりあえずは「乳母車」の初出を『文学界』とし、それが『不同調』掲載の際に「歪なる図案」と改題されたとしておきたい。

三、大正十四年初頭の聚芳閣人事

井伏の聚芳閣時代を精査したのは松本武夫「井伏鱒二の「聚芳閣」勤務時期」[6]であるし、前稿に引き続いて本稿も松本の恩恵に浴しているのだが、その大正十四年の、

一月、『趣味と科学』（第一巻第一号）発行。出版部に移る。

四月、聚芳閣を退社する。

という記述は、そのままでよいだろうか。

松本は井伏「満身瘡痍」（昭和二十四年十月）に基づいて、右のように大正十四年一月『趣味と科学』編輯部から出版部へ移ったとするのだが、「満身瘡痍」を含めて、井伏作品中の叙述と周辺資料とが矛盾する点が少なくない。

『趣味と科学』編輯部の人事について、大正十四年四月第一巻第四号「編輯後記」は次のように記している。

三月号は編輯者が変つたために、いろ〳〵編輯上の手落ちがあつたり発行日がをくれたりしましたが、今月号からはすつかり準備もとゝのひましたから、読者諸君の御期待をうら切るやうなことはないつもりです。

『趣味と科学』の勝手を知っていた編輯者が辞め、新たに不慣れな編輯者が三月号を担当したということだろう。三月号編輯段階での異動で、その時期は大正十四年一月後半から大正十四年二月頃までに想定できるのだが、もう少し周辺事情を探ってみよう。

まず、『趣味と科学』編輯担当者は別の部署に移ったのか、あるいは聚芳閣までも辞めたのか。また、『趣味と科学』編輯部は欠員を社内異動で補充したのか、あるいは、新たに社外から人を得たのか。『文学界』大正十四年新年号の奥付上欄に掲載された「賀正／聚芳閣員」という年賀広告は、「足立欽一／高梨直郎／松崎辰男／大野元造／松本清太郎／宵島俊吉／井伏鱒二／岡田伊三郎／斎藤晥／富樫祐吉」以上十名の社員名を掲げている。おそらく、これに少年従業員二、三名を加える規模の聚芳閣で、単に『趣味と科学』編輯部の交代でことが終わったとは思いにくいところがある。

そのような目で〈一九二六年版〉『文芸年鑑』（二松堂書店、大正十五年二月五日）を繰ると、「文士録」の狩野鐘太郎・川添利基の項に、関係するらしい記事が出現する。必要な箇所を摘録してみよう。

狩野鐘太郎　編輯人。明治三十一年四月二十三日、神田区錦町三丁目一に生る。〔中略〕今日では聚芳閣編輯部に居ります。

戯曲集『市場、工場』です。

川添利基　明治三十年二月三日、新潟県佐渡郡相川町に生る。早稲田大学、立教大学等に学び、松竹、東亜キ子マの脚本部を経て十四年二月から聚芳閣編輯部へ入つたが目下は休養中、先駆座、創作座、文明劇場等の演出監督をやつたこともある。創作集『凝視』の他、〔中略〕その他映画に関する翻訳著書が数種ある。先駆座同人。

〔太字、前田〕

狩野の入社時期は明記されていないが、川添と同じ大正十四年二月頃ではなかったかと思われる。[7] 若い劇作家を入社させたのは自らも戯曲を書いた聚芳閣社主・足立欽一の好みであろうが、聚芳閣では、大正十三年九月に井伏・宵島の新人を雇い入れたのと同じように、井伏とほぼ同年（井伏は明治三十一年二月十五日生まれ）の二十代後半の新進劇作家二人を、寄稿家から入社させているのである。

この狩野・川添の入社と呼応するかのように、『文学界』からは「長詩」〈短歌・俳句の短詩形に対する語〉の選者を務めていた宵島俊吉の名前が消える。大正十三年十一月第一巻第二号から大正十四年二月第二巻第二号までは、毎号巻末に「編輯局厳選／責任者／高梨直郎、宵島俊吉、松本清太郎、足立欽一」と四名揃って投稿選者に名前を並べていたのだが、大正十四年三月第二巻第三号からは選者名を纏めて列挙せず、各欄に選者の名前が掲げられるだけになる。そして、「長詩」の選には、宵島に代わって民衆詩派の詩人福田正夫が当たることになる。しかも、編輯後記に相当する「編輯室から」欄がこの号から創設され、その署名者として狩野の名前が登場する。大正十四年三月号から、『文学界』の誌面構成が多少なりとも変更されてくるのだ。

一方、これ以後、宵島が『文学界』に登場するのは、今日確認できているところでは、大正十四年十月第二巻第十号掲載「社会と文芸との交渉」〈アンケート回答〉だけである。創刊号を除いて『文学界』では、アンケート回答を社員から得ていないので、この大正十四年十月号段階では、宵島は聚芳閣社外の詩人として扱われていたと推測される。すなわち、大正十四年二月号限[8]りで、聚芳閣社員としての宵島俊吉は『文学界』の誌面から姿を消すのである。

これを暦年に当てはめると、二月号校了と推定される大正十四年一月下旬頃までの宵島の在社は確認できるが、三月号校了の大正十四年二月下旬頃に至ると聚芳閣関係雑誌からはその在社の事実を確認することができなくなるのである。[9]

このように見てくれば、『文学界』と『趣味と科学』両誌編輯部では、大正十四年二月号と大正十四年三月号との間で、大きな異動があったと考えるのが適切だろう。

月号表示の前月末頃にそれぞれの号は発売され、そのしばらく前に編輯・校正作業は終わると推定される。『文学界』では、社外依頼原稿締切を、表示月号の前々月二十日に設定していると推定されるので、それから原稿割付・校正などの編輯作業に入って、表示月

号前月半ば頃に校了とすれば、大正十四年一月二十日前後から二月十五日前後までの間に、両誌編輯部で人事異動が行なわれたと見られる。川添が前掲『文芸年鑑』で聚芳閣入社を「二月」と明記しているので、ここでは、大正十四年二月という言い方をしておこう。

以上のように、聚芳閣の主力雑誌『文学界』『趣味と科学』の二誌の編輯状況、『文芸年鑑』を検すると、大正十四年二月頃に聚芳閣内では人事異動があったのは確実である。川添・狩野が二人揃って入社とすれば、宵島・井伏も退社したとの推定もできなくはない。

四、『文学界』掲載記事と井伏退社時期

それでは、宵島も井伏も大正十四年二月頃に聚芳閣を退社したのだろうか。前節で述べたように、宵島の聚芳閣における足跡は大正十四年二月を限りに消えてしまうのだが、井伏に関しては、断続的にその跡をたどることができる。そして、それは、井伏聚芳閣在社時期について、一つの推定を可能にするようだ。

形跡の一つは、『文学界』に掲載された、「『祇園島原』定量分析批評」という井伏署名のゴシップ記事の存在である。『文学界』大正十四年七月第二巻第七号（大正十四年七月一日発行、大正十四年六月二十五日印刷）「ゴシップ」欄に掲載された記事で、本文末尾に「井伏生」と署名がある。足立欽一「須藤鐘一氏のために辯ず」〔目次では「須藤鐘一君のために辨ず」とある〕の末尾余白に、波ケイで囲んで配されたコラムで、目次には掲出されていない。内容は、大正十四年四月十七日発行の松本清太郎『祇園島原』の批評で、『祇園島原』を「女ごころ涙の意気地　三七・五瓦」などと薬品の成分分析を真似た茶化し半分の文章で、真っ向から批評したものではない。手早く書いてみせたという気配が濃厚な短文である。

他の号を見ると、「ゴシップ」欄やその他コラム記事は、目次に掲載されているものと、されていないものとがある。この井伏文が目次に掲出されていないところを見ると、目次原稿が完成した後、余白を埋めるべくこのコラムが加えられたと推定される。予定原稿が組上がった後に（おそらく初校段階で）、井伏文が執筆されたのではなかろうか。こうした臨機応変の対処が可能なのは、井伏が聚芳閣に在社していたからだと考えて間違いあるまい。そうすると、大正十四年六月中旬頃には、井伏が聚芳閣に在社していたと考えられるのである。あるいは、目次原稿との関連から考えると、これを六月下旬まで引き下げてよいかも知れない。

もう一つは、「乳母車」の掲載である。先に述べたように大正十四年八月号に井伏は「乳母車」を発表している。『文学界』では、社外依頼原稿締切を該当月号の前々月二十日としていると推定される。この大正十四年八月号の編輯状況を直接窺う手段はないが、同号では、唯一、中村星湖「川添利基君の『凝視』」末尾に「七月八日」の日付がある。脱稿日付と推定されるが、これから推測すると七月八日を過ぎても八月号に間に合ったようだ。しかし、成り行きで組んだと思われる中村文と違い（この中村文末尾には目次に掲出されていないコラムが埋草として配されている）、創作欄の、しかも、その冒頭に配された「乳母車」は、中村文よりも早い時期の入稿と思われる。とすれば、具体的な日付としては表示月号の前々月二十日頃すなわち大正十四年六月二十日頃には既に編輯部が「乳母車」

原稿を手にしていたと考えるのが無理がないだろう。

前稿では、小説で初めて原稿料を貰ったのは、『不同調』掲載の「歪なる図案」であるということを根拠にして、聚芳閣発行の『文学界』掲載井伏作品は、社内原稿として処理され、井伏は原稿料を手にしなかったのではないかと推定した。この推定が正しければ、「乳母車」が掲載された大正十四年八月号編輯時点においては、井伏は聚芳閣社員であったと考えられるのである。

しかし、この『文学界』大正十四年八月号は、井伏の退社を示唆する記事も載せている。

それは、川添利基「自分で書いた『凝視』の会の記」である。六月二十四日に銀座・キタニホンで開催された川添著『凝視』の出版記念会の記事で、末尾に出席者三十八名が連ねられている。狩野鐘太郎・高梨直郎・足立欽一・岡田伊三郎・松本清太郎といった聚芳閣社員の名前があるのだが、井伏の名前は欠けている。

聚芳閣内では旧来の松本清太郎グループと対立する気味のある、大正十四年入社グループの川添利基に井伏は近かったはずで、在社していれば、井伏がこの出版記念会に出席するべき立場にあったと思われる。この欠席を、聚芳閣との関係に直ちに結びつけるのは危ういが、これだけではなく、井伏の出席が期待される、もう一つの会合にも井伏の名前がないことが重なると、早計とはいえまい。

同じ号に、八月二日開催予定の文学界読者大会記事がある。そこには、「読者大会出席諸家【予定】」（ノンブルはないが六十八頁に相当）という一覧が掲載されている。これが、今言ったもう一つの会合だ。そこにも、井伏の名前が見えない。聚芳閣社員としては、高梨直郎・足立欽一・川添利基・松本清太郎・岡田伊三郎らの名前が見えるのだが、同格に並べてもよい井伏がいない。同じ頁には「大会当日籤引により差上る書籍名の一部」に井伏訳の「ズウデルマン・父の罪」を掲げ（ただし、ここでは訳者である井伏の名前は明示されていない）、しかも、同号の創作欄冒頭に井伏「乳母車」を掲載しているのだから、井伏が出席予定者として名前が掲げられてもよい。そうすると、この大正十四年八月号の記事「読者大会出席諸家【予定】」原稿入稿時点では、井伏は退社していたと考えてよいのではなかろうか。この記事の入稿時期としては、早ければ六月末、遅ければ校了寸前という時点（七月中旬頃か）が想定できる。

「「祇園島原」定量分析批評」執筆・掲載事情を推察すると大正十四年六月中旬（あるいは下旬）頃の在社が推測され、「乳母車」の八月号掲載は六月二十日頃の在社を示す。他方、『凝視』出版記念会欠席はその開催日である六月二十四日時点での不在、文学界愛読者大会出席予定者に欠けることは同記事原稿入稿時点での不在を示唆する。――これらを重ねて、あえて区切りのよい日に特定した言い方をすると、大正十四年六月二十日前後に、井伏は一度目の退社をしたとしてよいのではあるまいか。なお、大正十四年七月二十四日に開かれた狩野鐘太郎の出版記念会「表現派戯曲集『市場・工場』の会」にも井伏は参加していない様子である（『読売新聞』七月二十七日発行第一七三七五号第四面）。

五、井伏作品と〈事実〉

聚芳閣勤務時代を回顧した井伏作品の主なものに、「完結しない

月なみな生活」（昭和九年一月）、「習作時代」（昭和十年二月）、「雞肋集」（昭和十一年五月～十二月）、「満身瘡痍」（昭和二十四年十月）があり、「奥付けのない本」（昭和三十五年十一月）、「半生記」（昭和四十五年十一月～十二月）でも触れている。このように言及回数は多いのだが、勤務期間にしても、五箇月間と書いたものから十箇月間の勤務とするものまで、内容は必ずしも一致しない。

聚芳閣勤務時代について最も詳細に語っているのは、『新潮』昭和二十四年十月秋季小説特集号に創作として発表された「満身瘡痍」（目次では最初に置かれている）である。井伏自身は、「この中に出てくる「流るるままに」の女史というのは、山田順子のことである。最近野口冨士男氏が「徳田秋声伝」を十五年もかかって書き上げたが、この記念すべき伝記の、一頁分くらいの何とか篇にはなるかも知れない。」と語っている。[10] 作中の『流れ流れて』が『流るるままに』という実在する書物の参照を要求しているごとく、匿名・変名・実名を取り混ぜ、井伏の聚芳閣勤務時代を基本的参照枠として援用しているのが、「満身瘡痍」という作品であると、ひとまずは言っておこう。しかし、この〈小説特集号〉の創作欄に発表された「満身瘡痍」の叙述を、そっくり〈事実〉として受け取ってよいのだろうか。「満身瘡痍」では、時間系を厳密に追う叙述はなされない。挿話同士の内容の繋がりによって叙述がなされて、時間の先後関係は必ずしも明瞭ではない。そのため同一の〈事実〉についての叙述が二度、三度と作中に登場する。まず冒頭近くにこうある。

かつて私は、Sといふ出版社に前後五箇月あまり勤めたことがある。はじめ四箇月あまり勤め、非常に赤面するやうなことをしでかして退社した。出版担当を云ひつけられ、自分の手で三冊目の本を出したとき、奥附をつけるのを忘れてゐた。〔中略〕私は体裁が悪く、その他の事情も手伝つて、神経衰弱だと云つて退社したが、半月〔旧版全集では「一箇月」〕ばかりたつてS社へ遊びに行き、そのままその日からまた勤めることとした。一箇月ほど勤め、今度は実際の神経衰弱になって退社した。

（第十三巻二九六頁～二九七頁）

そして、再度、次のような叙述で触れる。「宵島君が社を止した後、二三日外泊してゐたA氏〔聚芳閣社主足立欽一〕から、出社中の私に電話をかけて来た。お金を会計から受取つて、白山の何々といふお茶屋まで届けてくれといふのである。」とあって、同席していた、岡耳子〔作中の山田順子〕に会う。作中の「私」は、岡が席を外した折りに、A氏〔聚芳閣社主足立欽一〕に向かって、

「あの婦人は、竹久夢二に会つて、いつもその足で社に訪ねて来るんでせう。城法君だつて吾妻君だつて、あんな子供でも、それを口惜しがつてゐるやうです。僕も、やや同感です。」

と言い、席に戻った女史と次のような遣り取りが書かれている。

ふと女史が、私の担当した「日本幽囚実記」の表紙が拙いと云つたので、私は云ひ返した。実際は書物のツカに比較して、背文字のカナバンが小さかつた。奥附も忘れてゐた。女史の云ふのが正しかつた。だが私は、かねがね女史に対して胸に一もつがあつた。ちつとは女史自身も世間の批評を参考にして、われわれの社へあまりしげしげ出入りしないやうにしてもらひたいと云つた。〔中略〕翌日、私は社を休んで、一週間ばかり続け

て休んだ後、神経衰弱だと云つて退社した。　（三〇四頁）

この退社は「入社して僅か四箇月後のこと」だとしている。先の引用中の「その他の事情」が、この岡（山田順子）との経緯ということだろう。

「満身瘡痍」を信頼する限り、この最初の退社時期は、山田順子が足立欽一から竹久夢二に乗り換えようとしていた頃のことになる。

山田順子と徳田秋声の関係を調査した野口冨士男は、大正十四年の項を次のようにまとめている。[11]

○大正十四年　秋声の紹介によって足立欣一を識る。四月、聚芳閣から『流るるままに』を出版。五月、竹久夢二と同棲、四十日にして破綻。七月、帰郷。帰省中、再婚の話あり。

和田謹吾は、「秋に再度上京、翌大正十四年春頃までに聚芳閣の社長と関係を結び、同年四月には同社から彼女の創作が「流るるままに」として出版になった。／そして、大正十四年六月十四日の「読売新聞」ゴシップ欄によれば、その頃にはその「本の装幀を夢二氏に頼みに行ったのがきつかけで」「拾年同棲の夫人と別れ」させて竹久夢二と同棲生活を始め、「両人の同居は未だ一月そこ〳〵になるかならぬか」であるということになっている。しかしその七月にはもう別れていた」とする。[12]

「仮装人物」や山田順子周辺資料から推して、五月（六月十四日記事が「一月そこ〳〵」というのだから五月中・下旬頃か）、夢二と同棲を始めたらしい。両者の接触は大正十四年二月下旬には始まっていた可能性があるが（『流るるままに』近刊予告を含む「聚芳閣出版だより（三月）」が『文学界』大正十四年三月号に掲載され、竹久夢二装丁のことが謳われている）、二人の仲が急速に深まったのは大正十四年四月から五月にかけての頃で、五月中旬・下旬から同棲が始まり、七月になると破綻を迎える、としてよいだろう。

山田順子『流るるままに』奥付には、大正十四年三月二十日発行、大正十四年三月十七日印刷とある。『読売新聞』の「今日の新刊」欄に『流るゝまゝに』の書名で見えるのが、大正十四年四月五日発行第一七二六二号第四面であり、その広告が『読売新聞』第一面に、徳田秋声『叛逆』と並べて掲載されるのは、それから一週間後、四月十二日のことであった。『読売新聞』の「今日の新刊」欄は大正十四年四月一日以降設けられたもので、後のものには掲載日前日の内務省警保局における調査と銘打っているところからすると、この四月五日に掲載された「今日の新刊」も、内務省警保局への納本によって掲載前日の四月四日に調査されたものと思われる。すると、『流るるままに』発売はその奥付記載より半月ほど遅れたように推定される。すなわち、大正十四年四月上旬に『流るるままに』は発売されたと見てよい。「満身瘡痍」では宵島の退社を『流るるままに』出版への憤激として説明している。そうである以上は、宵島の退社時期は、同書が出版され、その新聞広告等が掲載された後でなければならない。一方、「満身瘡痍」中のお茶屋の出来事は宵島退社以後、順子・夢二同棲以前のこととされている。この二つの条件を合わせれば、大正十四年四月中旬から、五月上旬あるいは中旬迄のおよそ一箇月の間のいずれかの日に宵島が退社したと推測される。

「満身瘡痍」が語る、井伏と山田順子との〈お茶屋挿話〉も同じ時期のことで、これに宵島の退社後という条件を加えるに過ぎない。

いずれにしても、「満身瘡痍」では〈大正十四年〉と想定されることを確認しておきたい。

ところが、この〈お茶屋挿話〉で話題に上る『日本幽囚実記』の刊行は〈大正十五年〉のことなのだ。『日本幽囚実記』奥付には大正十五年二月十八日印刷、大正十五年二月廿五日発行とある。

もはや縷言するまでもないだろう。「満身瘡痍」において、井伏退社の引き金になったという〈お茶屋挿話〉は、作品外〈事実〉を参照する限り、時期的にあり得ない話であり、井伏の錯誤でなければ、虚構としなければなるまい。「満身瘡痍」という作品は、自著の装丁に対する非難から始まり出版社勤めの失敗を語る物語で、年代記的に〈事実〉を記述する論理によって構成されたものではない。すなわち、標題に従って言えば〈満身瘡痍〉ぶりを描くことが、作品「満身瘡痍」のテーマであり、そこに向かって年代的には異なる複数の話題も集約されていったのであろうと思われるのである。「習作時代」では勤務期間を「十箇月ばかり」としたのが（第五巻一八三頁）、「満身瘡痍」では「前後五箇月あまり」と短縮されているのも、そういう虚構との関連から考察されるべきであろう。

第三者の証言や記録類によって検証できないことがらに関しては、井伏自身の言葉に拠らなければ、〈事実〉を明瞭にできないことは確かだ。しかし、作中の記述をそのまま素朴に年代記的〈事実〉として受け取ると、井伏的虚構の領域で〈事実〉を操作することになりそうだ。必要なのは、それぞれの作品が、どのような要請に基づいて〈事実〉を取り込みつつ、いかなる構成原理によって作られているかを検証することであり、その検証を終えてから、ようやく作品外〈事実〉を照射することが可能になるのではあるまいか。それが困難であれば、〈事実〉の側から作品を検証するしかあるまい。

注

（1）拙稿「『文学界』（聚芳閣）細目稿」（『兵庫教育大学近代文学雑志』第十二号、二〇〇一年一月二十日）。

（2）拙稿「『文学界』（聚芳閣）細目稿補遺」（『兵庫教育大学近代文学雑志』第十三号、二〇〇二年二月予定）。

（3）拙稿「井伏鱒二の聚芳閣入社は大正十三年十一月か――井伏聚芳閣勤務時代の検証」（『言語表現研究』第十七号、二〇〇一年三月十五日）。

（4）志水松太郎は「又奥の日付も、出版届けとは何等関係のないもので、出版届けに六月一日発行となつて居つても、奥付の発行日付は五月二十日でも、六月十五日でも差支へないものである。其処は出版届の要件が具備して居る事と、実際書物が書店へ廻る日が、規定通りになればよいわけである。」と述べている（『改訂増補第二版　出版事業とその仕事の仕方』峯文荘、一九三七年六月一日。二二九頁）。

（5）引用は紅野敏郎「「岬の風景」をめぐって――井伏鱒二と富沢有為男」（『群像』第三十五巻第十号、一九八〇年十月一日）に拠る。紅野は「井伏文学の源流――富沢有為男の「鷲の巣」をめぐって」（『早稲田文学』第一〇三号、一九八四年十二月一日）でも富沢文に言及している。

（6）松本武夫「井伏鱒二の「聚芳閣」勤務時期」（『解釈と鑑賞』

第五十二巻第六号、一九八七年六月一日)。のち『井伏鱒二――宿縁の文学』(武蔵野書房、一九九七年四月五日)に収録。引用は、単行本所収同題論文に拠る。

(7) 先に引いた『文学界』大正十四年一月号「年賀広告」に狩野の名前はない。ところが、本文でも触れたように、大正十四年三月第二巻第三号では新たに「編輯室から」という編輯後記に該当する欄が設けられ、末尾に「狩野」の署名が見える。この狩野は同姓者を他に見出せない以上、狩野鐘太郎としなければなるまい。とすると、『文学界』大正十四年一月号の編輯が終わってから大正十四年三月号編輯時期までの間、すなわち、大正十四年末から翌大正十五年二月までの間に狩野が入社したと推定されるのだが、先の『趣味と科学』編輯後記や、川添の入社時期も考慮に入れると、大正十四年二月という川添と同じ時期に見るのが妥当なところではなかろうか。

(8) 宵島は、『文学界』大正十四年二月号には勝承夫の本名で、岡田伊三郎、松本清太郎とともに井伏「うちあはせ」評を含む「四篇を三人で読む=批評と感想=」も寄せている。

(9) 〈一九二五年版〉『文芸年鑑』掲載「文士録」では、宵島は前年「文士録」の経歴末尾に、「現に『趣味と科学』の編輯に従ふ」との一文を書き加えている。〈一九二五年版〉『文芸年鑑』冒頭の「例言」(一頁)は、「文士録」に触れて、掲載の現住所は「大正十四年二月末日現在調べ」としている。「例言」の日付は「三月上旬」で〈一九二五年版〉の奥付記載発行日は大正十四年三月十五日、印刷日は三月八日だから、少なくとも「文士録」現住所だけは二月末日まで調べたという意味であろうか。なお、〈一九二六年版〉では「聚芳閣員たりしことあり。」と書き換えられている。

(10) 伴俊彦「井伏さんから聞いたこと」その六(『井伏鱒二全集第六巻 月報八』筑摩書房、一九六五年四月。四頁)。

(11) 野口冨士男「秋声追跡(2)――『仮装人物』の副女主人公」(『風景』第六巻第二号、一九六五年二月一日)。引用は、野口冨士男『徳田秋声の文学』(筑摩書房、一九七五年八月二十日。二六七頁)に拠る。

(12) 和田謹吾「秋声「仮装人物」の性格」(『明治大正文学研究』第二十一号、一九五七年三月三十日)。引用は、和田謹吾『増補 自然主義文学』(文泉堂出版、一九八三年十一月十二日。三四〇頁)に拠る。

附記

『文学界』の所在をお知らせいただいた阪本幸男氏、『文学界』閲覧に際して御配慮を賜わった三重県立図書館青山泰樹氏に深く感謝する。

(まえだ さだあき・兵庫教育大学)

〔校正追記〕長田幹雄編『夢二日記』3(筑摩書房、一九八七年九月三十日)一三四頁の記述は、大正十四年四月〜七月の足掛け四箇月間、実質三箇月間の夢二・順子の関係を示唆し、一四三頁〜一四四頁のそれでは七月二四日に二人が別れたと読める。